～あふれ出る湧き水と瑠璃色の水辺の町～

針江・霜降

はりっしも
Harisshimo vol.8 2018.7

針江・霜降の水辺景観まちづくり協議会

小さな町に
人と自然をつなぐ
湧き水と川がある

Message

針江・霜降地域は国の「日本遺産」・「重要文化的景観」の選定を受けています。

川にまもられて

針江区長　高田 一雄

■６月中旬の大地震とこれに続く平成最悪といわれる７月上旬の西日本豪雨により各地に甚大な被害がもたされました。幸いにも当地区には被害は無かったのですが、他人事ではなく災害はいつどこで起こるかわかりません。

霜降・針江にも川が流れており、定期的に川掃除を行い、ゴミを捨てる人は少なくなったものの、それでも捨てる人が絶えません。拾い片づける人がいるお陰で、大雨の時には重要な排水路になり、濁ったあとも水量の半分位が地下水なので、早く澄んだ川へと戻ります。

普段は子どもたちの魚とり・水遊び場となり、６月頃にはホタルが見られます。ホタルを気にかけ川縁の草刈りのタイミングを気遣う人、思いのある人たちのお陰でとっておきの空間となり、訪れる方が散策された時、異空間として感じられているかも知れません。私たちの大切な川を守ると同時に、川に守られ教えられている事を忘れてはならない。そんな思いが受け継がれていくことを願います。

遺産と災害

霜降区 山川 隆

■７月上旬、九州から中部地方の広範囲で過去にない水害が発生し、多くの犠牲者がでました。岡山県のある地域ではハザードマップ作られながら、多くの方がそれを知らなかったり、参考にしなかったため災害に巻き込まれたところがあったと聞きました。

日本は昔から災害の多い国であることは国民皆が実感していますが、又一方では何千年も昔から残っている遺産も存在します。なぜ、残っているのか、私たちの先祖が災害に強い建物を考えたり、災害の発生しにくい土地に建てたりしてくれたお陰だと思います。遺産を研究したり、その文化を地域住民や後世の人たちに伝えることは、災害の経験も伝えていくことになるのでは。

霜降地区には明治時代に建てられた「行者堂」（『国の重要文化的景観』の構成要素のひとつ）が存在します。これが現在にまで残っているということは、少なくともこの地域に今回のような大きな災害がなかったことの証明にもなります。今回の災害は、遺産をこのような角度で見ることを教えてくれました。

環境、そして文化

針江・霜降の水辺景観まちづくり協議会
会長　足立 亨

■針江集落とその周辺の人の流れを大きく変えたのが、平成 16 年のＮＨＫスペシャル「里山 命めぐる水辺」でした。注目を集めたのは、ヨシ原や内湖の豊かな自然環境であり、生命の営みであったと思います。

そして平成 22 年には、針江・霜降地区が国の重要文化的景観（文化財のひとつ）に選定され、また転機が訪れました。文化とは何か、少し戸惑いがあったことを記憶しています。ここには際立った文化財建造物や伝統行事があるわけではありませんが、私たちの見慣れた風景が文化財として大きな厚みを持つことになりました。

大川やカバタは、私たちにとっていつもそこにある普通の生活の場ですが、私たちの暮らしは時代とともに変化し、その水の文化は失われつつあるようにも思えます。“かつては” といった過去形で語られることが多くなってきています。

私たちの生活や集落の風景が変化していくなかで、カバタ文化をどう繋いでいくのか…。昭和の中頃、生水をホームポンプで宅内に引き込んだ生活が始まり、近年では大川でイカダ遊びに興じる子供たちの歓声が聞こえるようになったように、新しい水との親しみ方を考えてみるのも楽しいかもわかりません。人の営みとともにある生水とカバタのあり方こそが、かけがえのない文化的景観ではないかと思います。